

# 成り代わりヴァサゴの SAOライフ

kinopio

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

Pohの小説つてないなあと思つたので

p.  
s.

c vは藤原啓治より小山剛志のほうが好きです

目次

プロローグ

出会いは突然

現實

I t , s h o w t i m e

合流

フロアボス攻略戦

黒猫と

54 43 34 24 15 7 1



# プロローグ

メキシコ某所

ここは世界的な麻薬王の組織の拠点があつた  
殺人、誘拐、麻薬、多くの犯罪に手を染め、金を集めて凶悪な構成員を集めその力で  
政治界に多大な影響を与えてきた。

警察には金を払い抱き込んだ。

しかし思い通りに行かない者もいた。

そういうつた者はすべて殺した

時には

対抗する組織を殺して、

反抗する市民を殺して、

下克上を企む部下を殺して、

殺して、殺して、殺して、殺して… 数多の死体の山を築いた

そうしていると気づけば誰も刃向かわなかつた。

すべてが思うがまま、そう信じてやまなかつた。

しかし、その血にまみれた栄光は、血塗れたナイフでズタズタにされた。

\* \* \*

その部屋には硝煙と血の臭いが充満して、いかにも高そうなステンドガラスは割れ、金糸の刺繡が施された床全面を覆う絨毯は多くの人間が倒れ血で汚れていない箇所を見つけるのが難しい。

その屍山血河のなかに立つ一人の青年。

体の節々には血がついているがその端正な顔をゆがめる事もなく胸ポケットから煙草とライターを取り出しうつくりと煙を味わつて一息にはき出した。

彼の足下には全身を血で染め上げて体を震わし、息も絶え絶えな恰幅のいい男  
彼はここら一帯の裏社会を牛耳り、権力と武力で法の外に君臨してきた男であり目の  
前にいる青年の上司でもある。

「きつ…さま！な…ぜ…裏切つた！…」

その目には怨嗟や憎悪といったものも見て取れるしかしその中でも大部分は恐怖

青年はいつも無表情で何を考えているのか分からなかつた。目には一切の感情が抜けており不気味でもあつた。しかし能力は他の者達と明らかに一線を画しており殺しをさせても、金の管理をさせても、果てには医薬に関するても一流というまさに天才、いや鬼才という言葉が相応しいほど。

故に報酬も惜しまずに行えてきた。それほどこの男にとつて優秀な存在であり手放したくない存在だつた

しかし今では組織を裏切り壊滅させた。それもたつた一人で

「こたえ・ ろ。ヴァサゴ!!」

青年——ヴァサゴけだるそうに足下に落ちていた拳銃を拾い突きつけた。いつものように淡々とした、しかしその目は違つた。

その目には想望が浮かんでいた。

「俺のためだ、ボス」

銃弾は男の眉間に打ち抜き男は静かに地に伏した。ヴァサゴはまだか細い硝煙が立ち上つている銃を捨て出口に向かつて歩き出す。その顔にほんの少しの笑みを浮かべて

自分が周りの奴らと何かが、根本的に何かが違うと認識するにはそう時間はいらなかつた。物心ついたときから頭の中には霧がかかつた様にはつきりとしないおぼろげな部分があつた。

しかし、何故かは分からないがわからないなりに引っかかりを覚えるものが節々に感じ、それらが靄を晴らすきっかけになるだろうと半ば確信めた感覚が己の中にあつた。

そしてその時はやつてきた。

茅場彰彦という人物が脳の電気信号を受け取り実際にゲームの世界に入り込むという次世代のゲームを開発した

ニユースだつた。そのとき俺の頭のなかで茅場という名前に連鎖するようにならべと俺が知らないはずの情報が激しい頭痛とともに想起する。想像を絶する痛みに歯を食いしばつて一瞬ふらついた身体に力を入れて踏みどまる。どれほどの間そうしていたのか徐々に痛みが引いていき、自身が置かれている状況にようやく理解が及んだ。

どうやら俺は『ソードアート・オンライン』という前世にあつた物語の世界にいるらしい。その物語では『ゲームでの世界＝現実での死』というデスゲームにとらわれ抜け

出すために主人公達がゲームクリアを目指すものだそうだ。

そしてその中での俺はゲーム内でPKを推奨する『笑う棺桶』というギルドを率いる凶悪人物で主人公のキリトに執拗なまでに執着している。アバターネームはPoh。俺と同じ名前のソロモン72柱の悪魔の持つPrince Of Hellからどうたのだろうか。なかなか洒落がきいている。

「p h e w : :」

思わずため息が出てしまう。しかし存外にもこの現状を楽しんでいる自分がいる。

腎不全の父の息子を助けるために生まれその後はスラムに捨てられここに拾われ上からの命令を淡淡とこなして、と今まで目標もなくただ生きるためだけにいきてきた。そこには俺の意思はなくまるで道具だ。

、と今まで目標もなくただ生きるためだけにいきてきた。そこには俺の意思はなくまるで道具だ。

俺の親は俺を道具として作った。そして俺は自分から道具になろうと、成り下がろうとしている。

だがここ思い出した事は俺にとつて天命なのではのないか。

頭の中の霧が晴れる事で次から次へと面白い出来事があふれてくる。前の俺はよほどこの物語が好きだと思える。

このまま道具に成り下がる？

そんなものくそくらえだ。

この中に自分を巻き込みたい。

この中で自分がだけの物語を作り上げたい。

そのためにこれから障害であろう数多ある問題に今までもつとも頭を使い、有意義な

時間だった。

# 出会いは突然

ようやく日本にこれた。

日本に来るまでに多くの問題があつた。

まずは裏社会の人間だと足がつかないようにするために経歴の偽装

それに合わせたパスポートの作成

そして組織からの脱退

基本的に裏社会で情報を漏らされる事は一番危険視する事で俺のような幹部は——まあ幹部ぐらいの地位を持つと組織から抜け出す様な輩はいないのだが——多く重要な情報をつかんでるので抜けだそうとすれば殺される。別に暗殺者の一人や二人、三人や四人、どうって事ないのだが日本に行つてから毎日気を張るのは疲れるし面倒くさい。

前の記憶が戻つてから今まで見捨てていた様なスラムの子供達を助けたりと随分丸くなつたものだが人を——それも悪人ともなれば——殺すことに抵抗は感じない。

故に念入りに準備をして他の組織の耳に入るようそれとなく情報を流し連日の抗争

で疲弊したところで計画を実行した。

怪しまれないレベルの金を持ち、日本での在留資格を得て今に至る

タクシーに乗り込み予め購入しておいた新しい家に向かう間に今後の計画を組み立てる。

（今が2018／11／6、SAOの本サービス開始が2022／11／6のはず、物語開始のちょうど4年前。物語の主要人物は開始時点で中学生つまり…今は小学生か）失念していた…

というのも日本に来るまでは『どうやつて日本に行くか』ばかり考えていたので『日本に着いてからどう過ごすか』をかんがえていなかつた。この4年の間に何人かのコンタクトをしようかと考えていたが彼の年齢は18歳しかも生きるか死ぬかの弱肉強食の世界で生きてきたので風格が十代のそれではない。そんな人物が11、12才の小学生に近づこうものなら不審者扱い＆職質待つたなしである

自分らしからぬミスに側頭部に指を当てるがふつと笑みを浮かべてしまう。

まるで遠足に行く前の小学生のようだ、そんな人間くさいミスをしてしまつた事実が本当の人間になれているようで喜ばしかつた。

（しかしこれからどうするべきなのか…）

車窓から外を見ながら考えるが一向に案が浮かばない。そのまま時間だけが過ぎていき気づけば目的の家についていた。

とりあえず接触は諦めて今後の生活を考えるか

電子ロックを解除し日本は随分と進んでいるんだなどとどうでもいいことを考えた時。

「おにーさんここに引っ越してきた人?」

振り向くと天真爛漫な笑顔を向けた黒髪の少女と困り顔でオロオロした少女がいた。

「ああ、ここに引っ越してきたヴァサゴ・カザルスだ。よろしくお嬢さん方」

「うん、僕の名前は紺野木綿季ですこれからよろしくお願ひします!」

「こ、紺野藍子です。よ、よろしくお、願いします」

うん?

:

紺野木綿季

『アルヴヘイムオンライン』通称ALOと言われるゲームにおいて圧倒的な強さを誇りその反応速度はキリトに『SAOにいれば二刀流スキルは彼女に渡っていた』と言わせるほど。

しかし現実では彼女を含めた家族全員が後天性免疫不全症候群——AIDSを患  
い彼女以外は亡くなり最後は仮想世界の住人としてALOで息を引き取った人物。

その生き様はあまりにも鮮烈で短い人生を全力で生き抜いた姿は俺の中の知識とし  
てはつきりと残っている。

「隣に引っ越してきヴァサゴ・カザルスといいます。これ粗品ですが」

「まあ、ありがとうございます。お若いですね、一人暮らしも大変だと思いますが頑  
張つてくださいね。困つたら何か言つてくださいね」

「ありがとうございます」

「どうですか、中でお茶でも……」

「いやそこまでしていただきかなくても……」

引つ越しの挨拶のために隣の家——紺野家を訪れた。表面上は特に変わつてない  
が

(まさか隣とは……)

木綿季と藍子に声をかけられた後荷物を置いて二人に——主に木綿季だが——  
つれられて彼女達の家まで案内されたが、そこは庭をまたいだ俺の家のすぐ隣だったの  
だ。こんな偶然もあるのかと驚き、そして自分で言うのも何だが初めて会つた厳つい顔  
をした外人を何のためらいもなく声をかける彼女たちのコミュ力の高さに戦慄し、簡単

に家まで連れてきてしまふ警戒心のなさに呆れを通り越して不安になるというこの短時間で多くの感情が表れる。ちゃんとしてくださいよ、両親。

しかしこの子供にしてこの親ありと言うべきなのかご両親も底抜けで優しく明るい人たちだった。あっちの世界じや考えられない彼女たちの性格に日本の治安の良さにちよつぴり畏敬の念を覚えた。

「ご遠慮なさらずに、ささつどうぞどうぞ」

「いやしかし…」

「ボクもお兄さんの話聞きたい！」

そのまま紺野家の圧倒的なコミュ力と好奇心の強さに負けてしまった

「あ、あの…えっと…めんなさい」

俺に迷惑をかけてしまった事を気にしているのか藍子が小声で謝つてくる。気にするなどいう意味とこの家族のおそらくブレーク役である彼女のこれからのかつらの苦労を考えつい頭を撫でてしまつた。

：

「へーメキシコから単身で」

「ええまあ」

会話をしていく分かつたが彼女らと俺の相性は意外と悪くなかった。俺自体日本に

来るまでに仕事で様々なところに行つた事もあり話題には困らない。しかし彼女らはすでにH.I.V.に感染しているはずなのであまり遠出をしたことがないのだろう。聞き上手というか好奇心の塊といったほうが正しい気がする。俺が一息つこうとしてもすぐ話振ってくれて途切れることはない。

「じゃあさ、お兄さん出身地のお話してよ！」

好奇心の塊のような弾丸少女はまるで旅行から帰ってきた友人のように話しかけてくる。

「メキシコの話か？特に面白い事はないぞ。表向きは華やかに見えるがあそこは麻薬、誘拐、殺人、とかそんな犯罪が溢れかえってる。夜になれば麻薬の売人が歩き回り、警察なんか犯罪者が捕まれば賄賂を要求するなんざ当たり前、ひどいところは政治家まで抱き込んでいる所もある。日本とは全くの別世界だ」

「へ、へー」

しまつた、しゃべりすぎた

みんな若干引いている。日本に来てからこんなミスしてばっかりだ。いくら人間くさくなつたのを実感出来るからと言つても時期にとんでもないことを暴露してしまいそうだ。

「こほん、と咳払いをして

「とりあえず日も暮れてきたことですし夕食の用意もあるのでこのあたりで…」

「そうですね、長い時間付き合わせてしまってすいません」

「いえ、こちらも楽しかったですし」

そのまま玄関を出ようとしたとき木綿季と藍子が並んでまさに弾けるような笑顔という言葉が似合う、そんな笑顔で

「お兄さん、またねー！」

「ああ」

；

家に帰り何もない殺風景な部屋でコンビニのパンを食べながら彼女達のことを考えていた。

AIDSがいつ発症するのか分からぬという恐怖があるにも関わらず純真無垢な打算のない笑顔で見送ってくれる彼女たち。あの少女と家族はAIDSを発症して亡くなってしまう。

『前』ではHIVの完治まではいかなかつたがウイルスの増殖や活動を低下させ一般人とも変わらない寿命で子供を産む事さえでき、例えAIDSを発症してしまっても十分に助かる『コントロールが可能な病気』だつたが、調べたところこの世界ではまだ不治の病という扱いになつてている。

今まで悪意にさらされて、善意は何かの罠か悪意かという世界だつたのであの雲りつけのないあの姿がなくなるのは非常に残念だ。まだ出会つて数時間しかたつていなにも関わらずそう思つてしまつほどに彼女達に興味を持つてしまつたらしい。

今まで人の命を数え切れないので奪つてきた人間の考えとは思えないしらしくないとも思う。けれどどのように生きるのかは俺が決めることだ。

俺は『人間』なのだから

# 現実

『ソードアート・オンライン。

V R M M O R P G である本作は完全なる仮想世界を構築するゲーム機、ナーヴギアを装着して体験できる全く新しい歴史を変えるとも言われるゲームです！

本日より千人のみのβテストが始まります！

ベータテスターに当たつたラツキー皆さん、楽しい一ヶ月を！』

朝のゆつたりした時間の流れるリビングにはフライパンで卵を焼く音としつかり通る声ではきはきと一日の情報を伝える女性経営者アナウンサーの声

最近のテレビはSAOの話題で持ちきりだ。なんせ従来のゲームは全てプレイヤーがゲームの中の分身を操るものでありそこにはしつかりとした線引きがあつた。しかしSAOはプレイヤーの意識そのものをゲームに送りまるで実際に自分の体を動かしているかのように感じさせる。そのことに世界中のゲーマーは歓喜しその発売を今か今かと待ち望んでいるだろう。

そしてβテスター達は一足先に仮想空間を味わうことが出来るため今日という日を興奮し過ぎて寝れなかつた人も多いに違ひない。

そう未だに起きてこないあの姉妹達のように

「早く起きろ、いくら土曜日とはいえだらけるな」

「むう… …後5分…」

「私も…もう少し…」

「ならお前達のナーヴギアをブつ壊す」

「おはようございます」

俺が日本で暮らし初めてもうすぐ4年——つまり物語が始まるSAO本サービスまであと数ヶ月——が経とうとしていた。そしてその間に変わったことと言えば「お兄さん塩取って」

「私はソース」

「OK」

木綿季と藍子がこの家にいることだろう

：

最初に出会った日から彼女達は毎日何らかの形で俺の日常に関わりがあつた。あるときはまだこのあたりの地理に疎い俺を案内してくれたり

あるときはご飯に呼ばれたり

あるときは一緒に買い物したり

はじめはその強引さや行動力にイラッとしたこともなかつたわけではない。けれどそれはいつしか感じなくなり、彼女らと関わることが俺の生活の一部になつていた。

しかしある日ふと考へてしまつた。

このまま何もなれば彼女達はどうなるのか。今はまだAIDSを発症していないがそれは近い未来、確実に起ることで、そして彼女達はいなくなつてしまふのだろう。この世界からも、俺の世界からも。

その事を恐ろしいと感じた。

『前』の知識からこの感情が『恐怖』とは知つていたがこの人生では感じたことがなかつた。そしてもう一度味わいたいとは思わなかつた。

そうして俺は決めた。彼女達を失わないためにも俺が出来る最善のことをしようと。

「いいかゲームをするのはいいが昼食は抜くなよ」

「はーい」

そう言つて早くゲームがしたくて間の抜けた返事をするこの二人。そんな彼女達に内心ため息をつきながら横浜港北総合病院へと向かつた。

：

「おはようございます。倉橋さん」

「やあ、おはようヴァサゴ君」

この4年で俺は高卒認定試験を受け、現在はとある大学の医学部に通っている。そして俺が入った感染症についての研究をしているゼミにいたのが当時6回生だった倉橋先輩だつた。彼もH.I.Vウイルスについて研究しており、すでにウイルスの毒性を低下させる程の薬を完成させていた。そこで俺の持ち合わせている『前』の知識を使い、彼が卒業した後も研究を重ね、臨床段階まで持つてこれた。

そして今は臨床試験を受けてもらつている患者の元に向かつている

「体調はどうですか」

「おお、ヴァサゴ君か、今日はいつもより食欲もあつてね。随分調子がいいんだ」

「だからつて食べ過ぎないでくださいね、あなた」

木綿季達の両親は半年前にAIDSを発症し現在この病院に入院している。その時臨床試験の話を持ちかけ、快く承諾してもらつた。

薬も問題なく作用して先月から週3回の面談と月に一度外泊の許可が降りるまで回復した

「H.I.Vの数も活動もだいぶ収まっていますね。この調子ならもうすぐ退院も出来ますよ」

「ありがとうございます、倉橋先生」

「いえいえ、礼ならヴァサゴ君に言つてください。この薬を開発したのは彼ですので」「いや俺は倉橋先輩の作ったものに少し手を加えただけですよ。あなたの謙虚さは美德ですが過ぎるのは嫌みになります、礼は素直に受け取つておいた方が賢明ですよ」

「そうか、なら受け取つておくよ。」

ため息をつきながらやれやれと言つた風に肩をすくめた。

「そういうえばあの子達は大丈夫ですか、迷惑をかけていませんか、特に木綿季のほうは」

「そういうお母さんの顔には少し不安の色が浮かんでいる。」

この楽観主義の母親に毎日このことを聞かれるあたり本当にあの子達を大事にしていると思う。

確かに木綿季は好奇心が強く目を離した隙にどこかに行つてしまいそうで不安になるがそこはブレーク役の藍子が木綿季をしつかり止めてくれる。

「むしろ手伝いをしてくれて助かっていますよ」

この前トマトを切つて真つ赤になつていたのは血の気が引いたが。

「それと今日からSAOのβテストが開始したらしくですね、今頃世界最新のゲームを楽しんでると思いますよ。『お父さんお母さんにも自慢してやるんだー』って」

「そういえばこの前来たときにそんな話を興奮しながら教えてくれてたわあの子達」

思い返すと木綿季はともかくあの藍子まで興奮していたからな。

「確かに君も興味があつたんじやないか？よく調べてたじやないか」

そう実は俺もβテストには応募していたのだ。今では今の生活に十分満足しているし以前ではこの世界を『物語』として見てる節があつたが今ではそんなこともないし、SAOがデスゲームになることぐらいで細かい部分はよく覚えていない。

けれどやはり従来のゲームを過去のものにしてしまう程の代物には興味がある。

「まあ落選してしまいましたが…まあ本サービスまで我慢しますよ。先輩もどうですか？」

「確かに興味はあるけどボクはRPGものが苦手でね、何か他のものが出れば手を出そ  
うかなあ」

そこから話題はSAOにうつり4人で他愛もない会話が続いた

：

「ただいまうぐつ「ねえねえ、聞いてよ！すつゞいよ！SAO!!あのねうんとね…とりあ  
えずすゞいの！」…木綿季、少し落ち着け」

よほど楽しかったのか急に飛び込んできた目を大きく見開いて効果音があればキラ  
キラとついてしまいそうなぐらい興奮した木綿季を落ち着かせる。いつの間にか近く

にいた藍子も目をキラキラさせている。

ゆっくり話を聞くためにリビングでコーヒーとオレンジジュースを用意して話を聞く。

「ボク別の世界に迷い込んだのかな、って本気でそう思っちゃうぐらいでね」

「しかも本当に自分の体を動かしているような感覚だつたわ」

「そうそう、しかもソードスキルっていう必殺技がねこう…ぶわあー…いやズバーンかな？」

「それ、よく伝わってないと思うけど…」

二人とも必死にあの世界のすごさを教え様としているがいかんせんあの世界を表す言葉が見つからないらしい。

確かに仮想現実なんて全く新しいものだからそれをまだ13才の中学1年生には難しいのだろう。

唯一あの世界を表す言葉としたら…

「『これはゲームであつても、遊びではない』」

藍子がこれしかないといつたウンウンと頷いている。しかし木綿季はピンと来ていない様子で

「えつと…何の言葉だっけ？」

「開発者の茅場彰彦がインタビューで言つた言葉よ。あの世界を表すとしたらこれしか思いつかなかつたわ。あれはもう一つの現実みたいなものだから」

「確かに！」

：

『あの世界はもう一つの現実』

その通りなのだろう。あの世界では全ての事象が現実と何ら遜色ない。

自然も

物も

人も

感情も

そして――

『死』でさえも。

それが彼——茅場彰彦の望む世界であり、  
夢であり、  
紛れもない現実だから。

# I t , s h o w t i m e

2022年11月6日

人類は完全な仮想世界を手に入れた。

:

俺は今非常に焦っている。

俺はSAOがただのゲームではなくログインしてしまったが最後アインクラッド全百層を攻略するまで向け出すことはかなわず、仮想世界での死＝現実での死というデスマニアとすることを知っている。

当然そんなもを彼女達にプレイしてほしいはずがない。故に発売日にどうしても抜けることの出来ない用事が入るよう調整し次の販売まで待つてもらおうとした。これでデスマニアが始まつたとしてもその情報はすぐ全国を伝わり全て回収され彼女達が参加することはない。万が一ただのゲームであれば万々歳と抜け目ないものだった。

しかし彼女達の手にはSAOのソフトが。

原因は超お人好し献身系医師の倉橋先輩だ。

昼食を終えた後、珍しく先輩がこの家を訪れたのでご両親に何かあつたのかと焦つてしまつたのだが違うらしい。

「ではどうしたんですか？」

「ちよつと木綿季さんと藍子さんに渡したい物があつてね」

まさか、いやいくら何でもそんなはずは…

「じゃーん！ S A O のソフトだよ、ついでに君の分も買つてきてあげたよヴァサゴ君」

Oh :

彼は俺が買えないことを知るとなんと無理矢理休みを作り買いに行つたそうなのだ。そしてサプライズとして今日まで隠しておいたらしい。とりあえずお金返しどきます。

しかし俺は驚かざるを得なかつた。

医師は基本的に必要以上に患者とかかわるのはタブーだ。なぜなら治療の公平性がなくなる。

たとえば初めて出会つた患者といつも親しくしている患者がいて治療の順番の際に

冷静な判断が出来なくなつてしまふからだ。そのことをそれとなく聞くと、

「確かにボクは医師失格かも知れない。けれどね、ご両親が『現実世界では病気のせいで友達が出来なかつたけれどそんなことがばれる必要のないゲームの世界なら友達が沢山出来るかも知れない』ってうれしそうに言つていたのを聞いちやつてね。そんなこと聞かされたら医師の前に大人として彼女達を助けたくなつちやうんだ」

こんなことを聞いてしまふと流石に責めようもない。彼みたいな理解のある大人達がもつと増えれば彼女達の苦しみは減つていくだろうに。

(しかし一体どうすれば：)

表面上は先輩戸の会話を楽しんでいるように見えるが彼との会話の内容尾は全く頭に入つてこない。

現在の時刻は12:58

本サービス開始まで残り2分しかない。  
ナーヴギアを壊す？ いやもう時間がない

もう一度何か理由をつけて彼女達を呼ぶ？ いや時間がないし、目の前にいる先輩に

「後でいいじゃないか」と止められる。

クソツ！ どれももう時間がない。

そして

2022/11/6午後13:00、SAO本サービスが始まった。

:

浮遊城アインクラッド第1層 始まりの街

「おお…相変わらずすつごいなあ、ここがゲームの世界だなんて思えないよ」

周りに見えるのは石造りの町並みと行き交う人々——NPCがまるで現実の世界と錯覚してしまうような感覚だ。

それについ見入ってしまう。

どのくらいそうしていたのだろうか、はつと我に返つてお姉ちゃんとの待ち合わせ場所に向かう。

「お姉ちゃん、遅れてごめん」

「大丈夫よ、私も今ここについたところだから」

「それじや早く準備をしてフィールドに出よう！」

歩きながら会話をしていると見知った顔の人物が前を走っていた。

「あ、ヤツホー、ベータテスト以来だね、キリト」

ボクがそう言つてぴょんぴょん跳ねながら両手を大きく振ると彼は気付いて立ち止

まつた。

「！……ユウキに、ランか。久しぶり」

「お久しぶりですキリトさん」

久しぶりに出会った友人と挨拶を交わしてキリトもまだ準備が終わってないらしくなら、一緒に行こうとなつたので動き出したその時。

「おーい、そこの人たちー！その動き、ベータテスターだよな!?」  
「ちよ、ちよいとレクチャーしてくれよ！」

と、顔の前で手を合わせお願いしていくバンダナを巻いたビギナーの男の人。  
特に断る理由もないしボクとしては賑やかになりそうなので全然オッケー。

「ありがてー俺はクライインよろしくな！」

「ボクはユウキよろしくねクライイン！」

うん、この人とはうまくやつていけそうだ。

：

「ぐへえ!!」

突進してきたブレンジーボアをよけることが出来ず直撃してどもつた声を上げながら腹を押さえながら転げ回るクライイン。

「ははは！違うよクライイン、こうズバーンってやるんだよ」

そう言いながらソードスキルを放つてみせる。そこで満面の笑みでピースをするとなんかみんなジトーといった目線をこちらに向けてくる。

「ユウキつて教えるの下手ね」

「下手だな」

「教えてもらつてる俺が言うのも何だけどよ、下手だな」

「うぐつ…そんなに言わなくともいいじゃんか…」

そんなボクに代わつてお姉ちゃんがクライインに教え始め、理解したのかすぐソードスキルを放てた。

「ボクそんなに教えるのむいてないかなあ…」

「ユウキは感覚派だからな、俺もだけど」

そんなことをぼやきながらボクたちはフィールドでレベル上げをしていた。クライインも慣れてきてる。モンスターの突進を軽くいなしながらふと時計を見ると、時刻は5時25分。

「お姉ちやんどうする？ そろそろ終わる？」

「確かに時間もいい感じね、キリトさん、クライインさん。貴方達も？」

「おう五時半に熱々のピツツアを予約済みだぜ!!」

その用意周到さに舌を巻く。

右手を軽く下に降り、ウインドウを開き、横長の長方形をしたウインドウには本来、メニューの一番下に、『LOG OUT』と言うボタンがあり、それを押せばログアウトで起きる——筈だった。

「……あれ？」

「……お姉ちゃんも？」

「……ありや？」

ログアウトボタンが——なかつた。

クライインとボクはまあそんなバグもあるかといつて様子で流している。けどお姉ちゃんとキリトの二人は深刻そうな顔だ。

「いくら面白いといえどこんなバグが出てたら今後の運営に関わる大問題だ。GMコールをしても出ないなんておかしすぎる」

キリトがそうつぶやいたとき——

重く低い鐘の音が響き渡り体を青い光が包みこんだ。

：

あたりを見回すと石畳や、街路樹。そして正面遠くに見える宮殿。見間違えるはずがない。そこは『はじまりの街』中心広場だった。

「一体何が起きたんだ……？」

キリトが呟く。

どーなつてんだよ……と腰に片手を当ててもう片方の手で頭をかきながらクラインが空を仰いだとき、上空に突如真紅の市松模様が発生し、空を染め上げていった。

「お姉ちゃん…」

「大丈夫よユウキ」

なんだか怖くなり思わずお姉ちゃんに抱きついた。お姉ちゃんは私の背中をさすってくれるがそれでも心の中の不安は増すばかりだ。

そして告げられたのは死と隣り合わせの『デスゲーム』開始の合図だった。

:

現実世界では多くの人が亡くなりSAOプレイヤーは全て病院に搬送された。木綿季と藍子もすでに両親と同じ病院にいる。両親もすぐ駆けつけ彼女達の手をとり泣いている。

「ヴァサゴ君、ご両親：彼女を巻き込んでしまったのは私の責任です。謝って済むとは思っていません…しかし申し訳ありません！」

そういって頭を下げる倉橋先輩の体は震えている。彼が善意でやつたのは明白であるので両親も彼を責めない。

しかし善意でやつたからこそ彼はここまで責任を感じている。

「先輩、頭を上げてください。こうなつてしまふことなんて誰も予測できません。今は彼女達の健康を維持しましよう」

そこから非常に多くの人物がこの総合病院に搬送され、またその中の少くない人がすでに亡くなつていた。

——この光景を見ると木綿季や藍子もいつ死んでもおかしくないのだと思い知らされた。

もう日は暮れ外はもう暗くなつてゐる。彼女達の両親はずつとここで彼女達の手を握つてゐる。いつ死ぬのか分からぬ世界に自分達の愛する娘達がいるのだ。恐ろしいに決まつてゐる。

俺はこの家族には返しきれない恩がある。なら俺のやるべき事は——

「すみません、少しお話があります」

彼女達を——木綿季と藍子を護ることだけだ

：

「ここがSAOの中か——まるで現実、いやここはもう一つの現実だつたな」

ある人はこの世界から抜けるために外に。

ある人は自分の命を守るために中に。

そのため薄暗い夜のこの広場には人の影はなく不気味なほどに静かだ。

「さつさとみつけてこのふざけたデスゲームを終わらせる」

彼はコツコツと地面をならしながら静かに歩み始めた。

# 合流

モンスターの単調な突進をすれ違いざまに切りつけ、後ろにいるモンスターの視界左からの横風を蹴身をかがめることによつてかわし左脚の後ろ回し蹴りによつて蹴り飛ばし『シングルシユート』を放つ。よどみなく行われた攻撃をよけられずポリゴン片となつて消滅する。

「一体どこにいるんだか…」

すでにログインし始めて1ヶ月になろうとしていた。しかし未だ木綿季や藍子がどこにいるか分からず、昼は圈内で探して、夜は圈外でレベリングといった生活をしているが、いかんせんこのマップは非常に広大だ。さらにプレイヤー名も見た目も分からなければあちらからコントакトをとつてもらうしかない。そのため見た目は現実の姿そのままにしている。

空もだんだん明るくなつており時間にすると3～4時くらいだろうか。

「一旦街に戻るか…」

流石に体にも疲れがたまり、眠気を殺しながら帰路についた。

：

一ヶ月もすると人々ももうこれが現実である事を認めざるを得なく町中にも人々の姿が増え始めほんのりと賑わっている。宿で3時間ほど眠ると外で適当に歩きながら食べれるものを買い、町中を回る。彼女達が攻略を目指して動いているのならこの街だと目星をつけていた。そんなとき視界の端に移った張り紙には、

”トールバーナーの街の中央広場にて攻略会議”

：

目的の広場に着くともうすでに始まっていたらしく青色の髪のさわやかな好青年ともやつとボールのような髪型をしたおっさんが中央にいた。

「キバオウさん。君の言う『奴らと』はつまり……元ベータテスターの人達のことかな？」

「決まつとるやないか！」

こちら側に指を指して目つきを鋭くさせる

「こん中にもおる筈やで！　この攻略メンバーにこつそり入つてオイシイ思いしようと/or>する汚いベータ上がりの奴らが！　そいつらに土下座さして、溜め込んだ金やアイテムを吐き出して貰わな、パーティメンバーとして、命は預けられんし、預かれん！」

あいつは一体何を抜かしているのか？

ここは攻略会議であつてβテスターをつるし上げる場ではない。第一、そんな事を言  
われて手を上げる人物などいるわけがn 「ハーア！ボクβテスターだよ!!」

Oh：ユウキ久しぶりに会つたがそのたくましさは変わつてないな。藍子は：頭を  
抑えてため息をついており、その横にいる黒髪の少年とローブを被つた少女に向かつて  
何か話している。

他の奴らは全員ギョツツとしている。特にキバオウはこんな小さな女の子が出てくる  
とは思つていなかつたのだろう。公衆の面前で土下座にアイテム、所持金没収なんかさ  
したらキバオウが悪者である。

「発言いいか、それと嬢ちゃんもよく出てきたな、けど戻りな。このおじさんも嬢ちゃん  
からとりやしねえよ」

そう言つてキバオウを睨みつけ黙らし木綿季を一撫でして、席に戻るよう促した大人  
の対応を見せたアメリカ系の黒人はガイドブックを取り出した。

「これを配布してたのはβテスターだ。つまり情報は誰にでも手に入つた、なのに一月  
で二千人が死んだこの事実から今後どうするか考える。そういう会議だと俺は思つた  
んだがな」

つまりこのことから分かるのはβテストの時はかなりの変更が加えられたことだろう。あのガイドブックは参考程度にして鵜呑みするのは危険だ。

「出発は明日の朝10：00だ。それでは解散」

：

「全くあんな風に呼ばれて手を挙げて出るなんて」

ランは少し呆れた様子でユウキのさつきの行動にぶーたれている。

「だって、あの人があんなこと言つたらみんなの空気が悪くなつたから。

結果的にあの大つきい外国の人が出てくれたからボクは出なくて良か

つたか

もしれないけどあの時みんなβスターを敵扱いしたから少しでもその溝を無くしたくて名乗り出たの」

そういうと先程パーティを組んだキリトとローブを被つたアスナさんが少し驚いた表情になつた

「ユウキって意外と周りに敏感だよな」

「意外とはなんだ意外とはー！」

少年の発言に不満があるのかユウキは彼を揺さぶつている

「けどそう感じて出れるあたり木綿季は偉いな」

「ふふーんでしょでしょー！」

胸を張つて自慢する木綿季の頭を軽く撫でてやる

「ああ、そうだろ2人とも」

同意も求めると藍子とローブを被つた少女も頷いて肯定の意を示してくれた

「「「ところで」「」「」」

「なんだ？」

「いつからいたの!?」「誰?」

:

一通り驚いたところで

「俺の名はP。H、この二人の…お目付役みたいなところだ」

「ものすんごいヌルツと自己紹介したな…まあいいや、俺はキリト。そんで隣にいるが」「アスナよ、よろしく」

その後ユウキとランからの質問にも答えて全員で今後の方針を考える

「とりあえずこれだけの人数がいるから連携の確認をしどきたいんだけど」

「あ、それもそうだねー、アスナとお兄ちやんじやなかつたP。hはどんなプレイスタイル

ルかわかんないからね！」

「ユウキ、無理して呼ばなくていいぞ。リアルの名前じやなかつたらな」

：

トールバーナーの街の東の平原にて俺たちはアスナとPohの動きを見ているのだが。

(アスナはともかくなんでPohは短剣のソードスキルを使わないんだ?)

アスナは非常に高いAGIと細剣のソードスキルによつて敵を翻弄して瞬く間に消滅させている。Pohも短剣を逆手に持ち、動きから非常に高いプレイヤースキルを持つていて分かるが使うスキルは『シングルシート』のみ。ランとユウキ、アスナも同じ疑問を持つていて首をかしげている。

そのまま一體ずつ使わずに全ての敵を倒してしまった。

「Pohはどうしてソードスキルを使わないんだ?」

するバツが悪そうにして頭を搔いたが観念したのかため息をついた。

「やり方が分からんんだよ、ナイフを投げる奴はなんか出来るんだが」

絶句した。

もうこのゲームが始まつて一ヶ月が経つたのに未だにソードスキルが使えないなんて。

「なら教えてやるよ、いいかソードスキルを発動するにはその特有のモーションを取ることで発動するんだ。こんな風にな！」

そういういつつソードスキル《バーチカル》を発動してみせる。するとPohもおもむろにナイフを構えて《ファットドエッジ》を放ち、すぐさま鮮やかに二連撃につなげてみせる。しかし彼の顔はしかめつ面だ。

「? どうしたの」

「いや、ソードスキルが発動するために溜めを作らなきやならんわ、体が勝手に動くわで気に入らないなと思つてな」

思わず苦笑いを浮かべてしまう。確かにソードスキルを放つ前後には硬直がある。発動前のためは殆ど気にならない物なのだが：リアルじやどんな職業だよ。

「ソードスキルに合わせて自分の体を動かせばある程度操れるし速度と威力も上がるぞ」

するともう一度ソードスキルを放つがまだ納得していないようだ。

「なあラン、マナー違反だがPohって一体何の仕事してんだ？」

「それくらいならいいですが、ただの学生ですが」

「何者だよ。

「OK、だいたいの感覚がつかめてきた。キリトお礼と言つちやあなんだがこれをやる

よ

そういうつてウインドウにプレゼントのメッセージが…何々

「温泉卵か 「それどこで手に入れたの！」

突然俺の言葉に反応したランとアスナの女性二人に囮まれ問い合わせられる。

「いや、そこに洞窟があるだろ。そこの一番奥にいたモンスターを倒したら温泉が湧いてきたんで面白半分で卵入れてみたら出来たんだが…」

その瞬間恐ろしい早さで洞窟に向かっていき、Pohが呼び止める前にはもう見えなくなっていた。

「なんであんなに必死なんだよ、そんなにこれ食べたかったのか？」

「いや温泉に入りたいんじゃないの？」

「何言つてんだ？ 温泉卵ができるんだぞ。入つたら熱すぎて火傷もんだ」

「あ…」

そして洞窟の中であまりのショックに某狩猟ゲームのふらつとしたハンターが依頼に失敗した時のような両手両膝をついた姿で落ち込み、茅場晶彦に呪詛を漏らす女性：いや般若の二人がいたとか。

「!なんだ、この悪寒は？」

その時とあるG Mが心の臓を掴まれた感覚に陥り、震えが止まらなかつたらしい。

# フロアボス攻略戦

翌日約束の時刻に集まつたメンバーはデイアベルを先頭にフロアボスの部屋に向かつていた。

この世界に閉じ込められ一ヶ月経つても一層すら攻略できていないこの現状を打破すべく彼らは文字通り命を賭けた戦場に向かつてゐる

その中に会話は無く重苦しい空気が流れており聞こえるのは金属の擦れる音と地面を強く踏みしめる足音のみ

道中の敵との戦闘ができるだけ避けついに第一層のボスが待ち構える部屋に辿り着いた

「みんな俺から言うことはただ一つ、勝とうぜ!!」

デイアベルの激励に各々自分の得物を頭上に掲げてそれに応える

ふとユウキとランを見るといつもより全身に力が入り、神経も尖つている

これは良くない：

そう思い声をかけるがあまりの緊張にどちらも気づかない

肩に手を置き少し揺さぶるとようやく気づき振り向いた

「ユウキ、ラン、大きく深呼吸して力を抜け。いつも通りにすれば大事には至らない」

それでも手から震えが伝わってくる

戦う覚悟を決めたとしてもまだ13歳の子供だ

更に彼女達は病気のせいで他の人よりもシビアに命を考えることが出来る

だから怖いのだ

だから恐ろしいのだ

なんとか得た人並みの体、入院してはいるが元気な両親、何処にでもある普通の生活

それらを失うことが

けれどそうはさせない

手を彼女達の頭に置いてしゃがんみじつと二人の潤んだ目を見つめてはつきりと口  
にする

『必ずお前達を現実に生きて返す』俺はそう約束したんだ、だからー

「お前達が死ぬことはありえない、必ず守り抜く」

そのまま数回ゆっくりと丁寧に頭を撫でる。彼女達も震えが止まり手の甲でゴシゴシと涙を拭き取つた後二人ともいつもの華の咲いた様な笑顔になつた  
そしてちょうどよくバスの部屋の扉がゆっくりと開かれ始めた

センチネルが繰り出す振り下ろしを体を半身にする事で避けその勢いのままソバットでもう一体のセンチネルの元に蹴り飛ばし追撃の《サイドバイト》であっけなくボリゴン片と化した。

キリトとアスナ、ユウキとランのコンビも瞬く間にセンチネルを倒しているが他の班はうまく連携が取れず追い詰められているところもある。

このままではロードを攻撃している班に近づけてしまう。

「ユウキとランと俺で新しく湧いてくるセンチネルを引きつける、キリトとアスナはD班とスイッチして体制が整うまで時間を稼いでその後合流しろ」

新しく湧いた前方のセンチネルに、キリト達を追うセンチネルにナイフを二、三本投げこちらにヘイトを集め、こちらに前方から向かってくる敵の武器に二連回し蹴りを当て後方から攻めてきた敵の頭を使つてバク転で離脱。敵は頭を抑えられることで体制

を崩されてしまう

「はあ！」

「ウリヤー！」

その隙をランが《リニア一》で、ユウキが《バーチカル》で強襲し、あつという間に敵は消えてしまった

「good job」

：

ボスの体力も4本目のレッドゾーンに突入したのか武器を持ち替え始めた

取り巻きを相手する俺たちも攻撃に回って一気に片をつける、そう考えた時だつた

「下がれ！俺が出る！」

ディアベルが周りのメンバーを下げて一人で向かつた

おかしい

彼は一本当の命を預かる指揮官としては一素人ながらも冷静に指示が出せていた。

さらにこの場合誰が見ても全員で攻めるべきなのは火を見るより明らかだ。そしてボスの手には——

——曲刀ではなく巨大な太刀が握られていた

「急いで後ろに飛べ!!」

いち早く気づいたキリトがデイアベルに大声で呼びかけるが相手はすでにソードス  
キルを発動させた。今までとは全く違う素早い動きでデイアベルは翻弄され致命的な  
一撃を受ける

「ぐあああ！」

あまりの威力にデイアベルの体は大きく吹き飛ばされる。

誰もが今起こった事の衝撃の大きさに咄嗟に行動できなかつた。その隙はボスの追  
撃を許してしまふには十分だつた

「グオオオアアア!!」

デイアベルとボスの距離は瞬く間に埋まり放たれた横薙ぎの一閃は彼の体力を消し  
飛ばす

はずだつた

デイアベルに当たる前にP.O.Hが彼を攻撃範囲外に蹴り飛ばした。体力もレツド

ゾーンではあるがゼロではない。

しかし刀はすぐそこまで迫つておりもはやP.O.HのA.G.Iをもつてしても攻撃範囲から抜けるのは不可能——ではなかつた

なんと彼は迫りくる刀の側面に片手をつき反動をつけ側転をすることで敵の横薙ぎを避け、ボスの腕、肩、頭などを足場にし、敵を翻弄して的確に逆手に持つた短剣でダメージを与える。敵も彼を振り払おうと暴れるが力スリもしない。

そして突然彼は下から上に向かつて振り上げられた腕を踏み台にして上空に飛び上がり回りながらボスの頂点に落ちてくる。

しかしそれを見通していたのかボスは既に刀を振り上げようとしていた。

空中では体は自由に動かず先ほどのような回避はできない

誰もが見ても絶妙の距離、タイミングで放たれた不可避の一撃

突如彼の短剣がソードスキル『ラピッドバイト』のエフェクトライトを放ち爆発的に加速した

戦場——こと一対一の戦闘中での隙というのは死を意味する。

それはなりたての新米兵士から歴戦の武人全てに当てはまる。

故に誰もが隙を出さないように警戒し起こりうる最悪のケースを考え、目の前の状況に対応する。

しかしどのように警戒していてもとある場合において隙は出てしまう。  
それは『攻撃を敵に当てる途中及び当たる瞬間』である。

単純、誰もが知る当たり前のこと。

多くの強者、つまり戦いをよく知る者は『後の先』——相手の行動を見てカウンターを決める——を理想とする。

故にヴァサゴはあえて敵に必中となるであろう隙を見せ案の定敵は完璧な攻撃を放<sup>晒</sup><sub>した</sub>た。

言うは易し、行うは難し。

空中でソードスキルを放つ為に回る姿勢の維持する体幹とバランス感覚  
自分と敵及びソードスキルによる加速でギリギリ避ける位置関係を完璧に把握する空間認識能力

そして少しでも噛み合わなければ失敗する事を前にして冷静にいる精神力  
これら全てが揃っている彼だからこそ可能な芸当である。

それでもボスの体力をゼロにするには届かなかつた。しかし彼は慌てない  
「決めるよお前ら」

ずっと相手をしていたことでボスのヘイトはP.O.H一人に集まつていた。  
だから気づかなかつた。

後ろから接近するユウキ達に

「「ハアアアアアア!!」」

「グオオアアアア!?」

女性陣による不意の高速の斬撃を全て受け大きく怯む、がまだ一押し足りなかつた。  
せめて道連れに、とも言わんばかりの力任せの一撃を放とうとする。

しかしそれは叶わなかつた。

彼女達の後ろの陰から現れた最後の剣士による二連撃『バーチカルアーク』は体を引  
き裂き小鬼の王はまるで散桜の蝶のように消えた

congratulation!

その文字が空中に映し出される。数瞬おいて全員に第一層をクリアしたという実感  
が徐々に湧き上がりそれは歓声となつて部屋に響き渡る。

「やつた、やつたよ…漸く第一層クリアだ！」

「やつた、やつたよ…漸く第一層クリアだ！」

「ええ…これで帰るための希望が持てるわ！」

「そうだな、それにしてもよく頑張つたじゃないか。大活躍だな」

「それはあんただろう」

すると広場でキバオウを論破し、ボスの攻撃の多くをパリイしていた黒人とデイアベルがいた

「俺の名はエギル、今回のMVPは100パーお前さんとその班だ」

「俺も異論はないよ、それとさつきは助かつた。君が蹴つてくれなかつたら今ここにいなかつただろうからね」

「生きてて安心したよ、それよりもなんであの時一人で突撃したんだ、お前は全体を広く見えるほど冷静だつただろう？」

ユウキやラン、アスナ、それにエギルも違和感を感じていたようだがキリトだけは何か確信があるような感じだ。その言葉にデイアベルは少し俯いたがすぐに意を決して「リストアタックボーナスは分かるか？」

「トドメを刺したプレイヤーにのみに与えられる唯一の強力なアイテム、これを知つてるつてことはデイアベル、アンタβテスターだな」

デイアベルの問いにキリトが答えゆつくりと頷く。

「このゲームをクリアするにはあと99回もこれ以上の極悪なボスに勝たなきやいけな

い。その間多くの人が絶望せず生きていくためには帰れるという希望がいる。けど攻略の最前線にいる彼らが効率よく、なつかつ安全に着実にクリアまでにたどり着くにはリーダーが必要だと思ったんだ。それには周りより強くないといけない：」

彼は覚悟を決めたような力強い雰囲気を醸し出している。

しかし次の瞬間柔軟な笑みを浮かべた。

「けど君らを見て思つたんだ。自分よがりじやなく相手を信頼するつてこともあるんだけってね：礼を言いたい、ありがとう。あと迷惑をかけた、すまなかつた」

「気にするな」

実際のところ、彼は100%善意で助けた訳でない。

ディアベルは物事を客観的に俯瞰に長けカリスマもある。さらに荒削りではあるが指揮も良くできている。

彼を失うことは士気の大幅な低下と攻略の足並みが揃わなくなり元来嫉妬深いゲーマー達によるいざこざが起きる可能性が非常に高い。

そして結果的にユウキ達をより危険に晒すことになる。

しかしそんなことを口にすれば非常に面倒になるのはわかっているので心に留めておく。

その後ディアベルとエギルをフレンドに登録して次の街のアクティベートに向かつ

た

「そーいえばお兄ちゃん、デイアベルさん蹴つちやつたけど街に入つて大丈夫なの?」  
「……しまつた」

## 黒猫と……

暖かい陽の光が辺りを包み始め空が明るくなり始めた。

ゆつたりとした風が草木の柔らかな匂いを乗せてひゆるりと風が吹きチュンチュン、と鳥の鳴き声がする。ああ、とても素晴らしい天気だ。美しい陽気にプレイヤーは心も体も穏やかだろう。

ただし身の安全が確保されている、という条件がつくが——

ここはAINクラツド22階層のとある森

森の中で縦横無尽に動き回る影が一つ

その中心には二足歩行の人の形で鎧を纏つた三体のリザードマンがいた

動き回る影と戦つているのだろうがリザードマンが武器を一回振るうまでに三度の切り傷をくらい相手にはカスリもしない

このリザードマンもLVも20とランダムポップするモンスターの中ではこの階層の中で最高クラス、弱いわけではないが——  
「——フツ！」

彼らは自分たちを襲つた影の姿を見ることさえ叶わず、消滅した

「ツハア～～～」

リザードマンを一方的に倒した影——p o h は深く息を吐きながらぐつたりとした様子で地面に腰を下ろして木にもたれた。

しばらく藍と赤橙のグラデーションに彩られた空に視線を遊ばせ、うつすら見えていた月がもう影も形もない。ゆっくりと腰を上げゆっくりと歩き始め一つのひときわ大きな木があり、その根元の苔の生えた根を押すと根と根が作った人一人が入れる隙間があらわれた。少し周りを見渡すと彼はそこになんのためらいもなく飛び込みしばらく落ちるとひらけた場所にでた。

陽の光はないがヒカリゴケと光石のお陰でほんのり明るい。そこには焚き火と大きなアイテムボックスがありここが彼の拠点だった。そして壁の窪みに置いてある寝袋に入るとすぐに眠り始めた。

何故彼がこんな生活をしているかを簡単に説明すると彼は他人に危害を加えたオレンジプレイヤーなのだ。といつても意図したものではないが——

オレンジプレイヤーは街に入ると鬼のように強い衛兵に襲われるため基本的に圈外で活動する。しかし圈外ではモンスターが常にポップするためパーティならまだしもソロではおちおち寝ていられない。迷宮区のサーフスポットではモンスターは現れないがプレイヤーに襲われる可能性も十分にある。

しかしこの場所は穴場中の穴場、この森 자체難易度は高いしその上視界も悪く奇襲をされやすいので人気はない。彼もこの森をマッピングしている時に偶々見つけそれ以來ずつとここを使い続けている。

自然と目が覚めゆっくりと上体を起こす。若干疲れも残っているが再び寝る気にもなれず寝袋から体を出すとそこには——

「・…………きゅう…………」

入り口で目を回して積み上がっているお転婆姉妹がいた。

ここは前線から10層以上も下の迷宮フロア。俺たちはユウキの片手剣の素材となるアイテムの収集を目的にそこに潜っていた。

ユウキは紫のノースリーブとズボンというボーリッシュな格好で、ランは淡い空色のゆつたりとした長袖とロングスカートとお互い自分の性格が出ている。

「それでもよく俺の場所がわかつたな、マップを見ても地下にいるかなんてわからんだろ?」

「たまたまだつたんだ、初めはメールで伝えようかなって思つたけどたまには僕らから会いに行こうと思つてあのおつきな木についたんだけど」

「ユウキが座った瞬間に根っこが動いてそしたら隙間に落ちていったから私も慌てて飛び込んだやつで…」

「そのまま姿勢もただせず転がつたと…」

苦笑いしながらも、でも今お兄ちゃんの暮らしてるところ秘密基地みたいでカッコいいね！と目を輝かせるユウキと恥ずかしかつたのか両手に手を当てて顔を隠すラン。

まるで正反対の反応に見た目は似てるが性格は全く似てない二人を連れてモンスターたちを蹴散らしていく。

「そろそろ切り上げるとするか」

「うん、十分集まつたし：あれ？」

「あら？」

しばらく迷宮区を回りながら素材を集めついでに使つていらない武器の熟練度上げもしているとモンスターに追われながら撤退してくるパーティと出会った。

ろくにパーティを組まず、ユウキとかランのスリーマンセルしかしない俺から見てもバランスの悪いメンバーのそれは余裕こそまだギリギリ残つてはいたがここはまだ迷宮区の中盤あたりでここを凌いだとしてもまたすぐにモンスターに襲われるに違ひない。

そこでお人好しなうちのわんぱく娘は助けにいった、その時だつた。

颯爽と黒づくめの片手剣使い——キリトが現れた。

彼のレベルは攻略組トップクラスでプレイヤースキルも言わずもがな。中階層のモンスターに手こずるわけもなく一撃で吹っ飛ばした。

——がそれがまずかつた。

まずは「すげえ！」といった類の歎声。その次に次々とハイタッチ&握手。予想よりも遙かに相手のコミュ力が高かつたため——どちらかといえばウエーブ系のテンション——にユウキは救援をとりあえずやめた。

——賢明な判断だ。今からめっちゃ面白くなりそうだからな

キリトは戸惑いつつも笑みを浮かべ、差し出された手を握り返していた。

かなり神経を使つて噛んだり拳動不審にならないよう気をつけているのがわかる。キリトには悪いのだが、非常に腹が痛い。横目で見るとユウキとランは腹を抱えて笑っている。

ヒーローみたいに颯爽と現れた奴が対人関係で苦戦しているのだ。

笑わない方がおかしい。

極め付けはそのパーティ紅一点の黒髪の結構可愛い槍使いが涙を浮かべながらキリトの手を握っていた。顔も若干赤くなっていた。

彼にとって女の子にお礼を言われるなんてフロアボスの発狂を正面から受けるのに

等しい。

「これ以上は俺たちの腹がもたないので助け舟を出すことにした。

「よおキリトまた口説いてんのか？」

「キリトさん浮気は良くないですよ」

「やつほーキリト、久しぶりだね！」

「あ、P.O.Hたちか……か浮気なんかしてないよ……相手がいな……んだからまじか、マジかこいつ。アスナのあんなアプローチを見てまだそんなこと言えんのか。

ユウキとランも信じられないような目をキリトに向いている。

アスナがキリトを攻略できるのか……

「さつきはありがとう。よかつたら、街に戻った時に何か奢らせていただけませんか？ そちらのお連れさんも一緒に……つてオレンジプレイヤー!?」

その瞬間彼らの顔には驚愕、敵意、恐怖が宿った。

武器を構え、いつ襲われても対応できる姿勢をとる。

「わ～～!! 待て待て！ この人オレンジだけど悪いことしてないから！ 悪い奴なら女の子二人連れて行動なんてしないだろ！」

「……俺が一人を脅して無理矢理協力させている「黙れ！ これ以上話をややこしくする

な！」

なんやかんやあつて誤解を解いて自己紹介を済まし主街区に戻つて打ち上げをしよう——となつたがP.O.Hは圈内に入れないの支払いだけするといった。もちろん周りは断固拒否したが

「最近ユウキとランのお目付け役としてのそれらしい事も出来てないからこれくらいとしてほしい」

と譲らなかつたので周りも渋つたものの、承諾した。

その後、主街区に戻つたキリトたちは酒場で打ち上げをしていた

「へえ、みんな攻略組なのか！」

「ええ、まあ」

ケイタが興味津々に聞き、ランはにこにこ笑いながらそれに答える。

どうやらトッププレイヤーに嫉妬するタイプではなかつたようだ。

「でも今日はたまたま通りかかつてよかつたよ。面白いものも見れたし……そうだキリ

ト」

後半何やらによによしながらキリトの方をチラつと見たが何か思いついたようにキリトに声をかける。

「キリト、ここ入りなよ。君最近攻略からちよつと身を引きたいって言つてたろ。たまには中層プレイヤーの育成を手伝つて見たらいいんじゃないの。いいかな、みんなは」月夜の黒猫団のみんなは驚きつつも快諾してくれた。ソロでありながら攻略の最前线で戦うキリトから直接の指導なんて彼らのような攻略組を目指す中堅プレイヤーにとつては願つても無いものだろう。

特に紅一点の槍使いのサチはとても喜んでいた。流石最強のフラグメーカーといつたところか…

「でも俺は感覚派だし…人に教えるのは苦手なんだけど」

「それなら大丈夫！僕とお姉ちゃんも協力するからさ」

「わたしはまだ了解してないのだけれど…まあいいわ」

「ユウキはともかくランは助かるな」

「ねえ……それどういう意味？」

そんなゆるーい感じで彼らの夜がつづいていつた

一方その頃P.O.Hは

「グアアアアア!!」

「うわあああああああ!!!!」

「shut up!!」

た

血盟騎士団っぽい少年と吟遊詩人っぽい少女を担いでモンスターと鬼ごっこしてい